

A Japanese Translation of Wulfstan's Homilies
on Archbishopal Functions

試訳 ウルフスタンの「大司教の職務」に係わる説教

和田 忍
市川 誠

試訳 ウルフスタンの「大司教の職務」に係わる説教

外国語共通教育センター 和田 忍（東京都市大学）
市川 誠（東京理科大学）

1. はじめに

本稿は、後期古英語期の散文作家ウルフスタン (Wulfstan 生年不詳 -1023年没) の「大司教の職務」(Archiepiscopal Functions) に係わる説教の日本語訳である。本稿が底本とする *The Homilies of Wulfstan* (1957) の編者である Bethurum によれば、以下の作品が「大司教の職務」に係わる説教に分類される。なお、各作品の右に記したページ数は、Bethurum の刊行本でのページ数を示す。

- (1) The Pastoral Letter (pp.225-32)
- (2) The First Sunday in Lent (pp.233-35)
- (3) Cena Domini – The Reconciliation of Penitents (pp.236-8)
- (4) Ezechiel on Negligent Priests (Latin) (p.239)
- (5) Ezechiel on Negligent Priests (English) (pp.240-41)
- (6) The Consecration of a Bishop (pp.242-45)
- (7) The Dedication of a Church (pp.246-50)

本稿では全編ラテン語で書かれた (4) を除く 6 つの作品の日本語訳を提示する。過去に公刊した一連のウルフスタン作品の翻訳と同じく、拙訳を提示する前に、「大司教の職務」に係わる説教を Bethurum (1957) と Lionarons (2010) の記述に従い簡単な説明をする。

表題が示すように、上記の作品は、司教や大司教の務めに関する説教であり、ロンドン (London)、ウスター (Worcester)、ヨーク (York) で司教や大司

教の職を務めたウルフスタンにとって身近な主題ということが出来る。(1)「牧者の手紙」(The Pastoral Letter)はウルフスタン自身の著作である。この作品は、文字通りの手紙ではなく、口頭による講演のために作られたものである。Bethurumはこの手紙が賢人(the Witan)の会議で読み上げられた可能性を示唆する。また、この作品では、彼の他の作品とは異なり、ウルフスタンの作品に特有の強調語がほとんど含まれておらず、司教と職務を淡々と正当化することに留まっている。(2)「四旬節の第一日曜日」(The First Sunday in Lent)と(3)「主の晩餐」(Cena Domini – The Reconciliation of Penitents)は、それぞれ四旬節の始めと終わりに用いられる説教である。ともに四旬節の間に求められる赦しの秘跡と関連している。特に、前者の「四旬節の第一日曜日」は簡潔な内容で、『親愛なる人よ、…は私たちにとって大いに必要である』(*leofan men, us is swyðe mycel þearf is...*)というウルフスタンの作品におなじみの表現で始まるが、この説教の中で、ウルフスタンはこの定型表現に変化を与えているのが特徴である。また、「四旬節の第一日曜日」の一部と「主の晩餐」のすべては、サン・ジェルマンのアッボ(Abbo of St. Germain)のラテン語説教に基づいている。(4)-(5)「怠惰な司祭についてのエゼキエル書」(Ezechiel on Negligent Priests)と(6)「司教の聖別」(The Consecration of a Bishop)は、いずれも司教の職務を内容に含み、両者には緊密な関係性が認められる。「怠惰な司祭についてのエゼキエル書」はラテン語と古英語で書かれている。前者のラテン語版(4)はエゼキエル書の内容の抜粋を集めたものであり、他方、後者の古英語版(5)はラテン語からの翻訳である。「司教の聖別」を読むと、大司教のみがこの説教を使用したと考えられる。この推測は、(7)「教会への献呈」(The Dedication of a Church)からも伺える。「教会への献呈」は、クヌート(Cnut 生年不詳-1035年没)が戦いで勝利の奉納を教会で行うために、ウルフスタンに命じて作成させたと思われる。

次節以降で、「大司教の職務」に係わる説教の各作品の日本語訳を提示する。なお、Bethurumの刊行本では斜体で示される聖書の引用箇所日本語訳は、前稿と同じく、共同訳聖書実行委員会『聖書新共同訳 旧約聖書統編つき』に従う。

2. 牧者の手紙 (The Pastoral Letter)

(Bethurum p. 225) 親愛なる人たちよ。すべてのキリスト教徒は、教えと律法を通して神の正しさを知り、すべての被造物の支配者であり、創造主である全能の神を決然と信じる必要があることを理解しなさい。また、あらゆる人は、自らがどこから来て、何であり、何になるかを理解する必要がある。最初に、土から私たちは作られ、土へと私たちはなり、その後、この世での行いに応じて、終わりのない永遠の苦しみを持つか、永遠の喜びを得るかのどちらかである。(p.226) ああ、私たちが愛し、そして暮らすこの世の時は短く、惨めである。しばし、最も慈しまれる時にすぐに失われるのである。しかし、私たちににとって最も必要なように行おう。私たちに決して欠けることのないことを努め、全心と全力で神を愛し、熱心に彼の御心を行おう。彼の御心とは、私たちが、常に、私たち自身の必要に応じて奮闘し、私たちが、この世で彼の御心を行う各人に用意した天国に招かれるに値することである。また、私たちの必要に応じて行う。あらゆる点でできるだけ、慈悲深く、寛大で、謙虚で、誠実に、欺くことなく、正しくあろう。私たちが洗礼を受けた時に私たちが約束したこと、また、洗礼での私たちの庇護者が約束したことを考えよう。すなわち、私たちが常に神を愛し、彼を信じ、彼の律法を守り、悪魔を避け、彼の邪悪な教えから熱心に離れることである。このことは、洗礼を受けるあらゆる人に約束された。子供はその若さのために話すことができないけれども、彼の友人の庇護者が彼が自ら語るすべてのことを彼のために代弁する。(p.227) しかしながら、必要以上にこの約束の意味を知らない多くの人がある。2つの単語が重要である。すなわち、「アブレメンシオ」と「クレード」である。

親愛なる人たちよ。私たちすべての必要のために、彼はこの世に赴き、私たちの必要のために、彼は死を受けた。その時の前には、この世には、私たちの祖先の行いのために悪魔が人類を支配する地獄に赴くほど名高い人はいなかった。しかし、キリストは、彼が自ら縛られ、打たれ、磔をされ、鉄の釘で手足を突き刺され、死に至ることを許した時、彼の慈悲を通して、私たちの必要のために大いに苦しんだ。しかし、彼は死から復活した三日目に生死を支配する力を持つことを明らかにしたのである。

親愛なる人たちよ。誰が、自らのいのちを捨て、それによって、友人を死から救うほどの友情を他人に示すことができるだろう。(p.228) キリストが私たちのために死を受けなければ、私たちすべては永遠の死で滅びただろう。しかし、彼は自らの貴い血で私たちすべてを贖い、彼の恩寵を通して、もし彼がそれに値するなら、天の御国を与えるのである。私たちが神の感謝を神にささげることが、決して大きすぎないように思われない時でも、私たちに常には常に小さすぎるのである。なぜなら、彼が私たちにこれまで行い、毎日行い、これから行うことをすべてに対して、私たちが最も必要とする時、もし私たちがそれに値することを望んでも、私たちは決して彼に報いることはできないからである。

親愛なる人たちよ。私たちに必要なように行おう。私たち自らの必要に熱心であり、私たちの罪を止め、あらゆる不正を避け、熱心に正しさに向かおう。人が私たちにすることを望むことを他の人に行うことほど正しい定めがないことを理解しよう。私たちには一人の天の父があり、私たちはすべてキリスト教を通して兄弟であることを考えよう。それゆえ、キリスト教徒は他の人を悪く扱ってはならない。なぜなら、人が、この世で不正にも、言葉または行いで他の人を傷つけるすべてのことは、それを予め償わない限り、その後、彼自らを何重にも傷つけるだろう。(p.229) むしろ、全能の神を熱心に喜ばせよう。真実の平和と調和を共に持とう。常に神にできるだけのことを行い、それによって永遠の喜びを得よう。私たちのキリスト教を清らかに保ち、あらゆる異教を拒絶し、正しい信仰を持ち、日夜、頻繁に、教会に行くことを愛し、懺悔聴聞僧が私たちに示す生活を行い、常に、誓約を慎重に保ち、祝祭日を正しく理解し、私たちの施しを熱心に分け与え、喜んで、神に相応の賦課、すなわち、彼がこの儂い世に私たちに与えたすべて、歩く物、育つ物の初物の十分の一税を行い、私たち自らの必要として、小さなものでさらに大きなものを手に入れよう。

さらに理解しなければならないことは、私たちはまた謙虚に、1年の賦課において、私たちの祖先がかつて神に約束したことを実行することである。すなわち、教会税、ローマ税、教会税、(p.230) 照明税である。私が語ることを行う人は、自らに利益を与えるのである。そして、それは確かに全く真実である。望む人は信じよ。ある時が私たちすべてに来る。それは、私たち

がこの世に残すものより望ましい。そこで、私たちは、できる限り、熱心に神の心に気に入るのである。しかし、私たちは、かつてこの世で行った行いに応じて、単純な報いを得るだろう。地獄の苦しみに値する人に災いあれ。そこで永遠の炎が激しく混じり合い、永遠の恐怖がある。永遠の畏れがある。永遠の悲しみがある。永遠の悲嘆がある。常に続く嘆きがある。嘆きの呻き声がある。あらゆる惨めとすべての悪魔の苦しみがある。そこに罰で留まる人に災いあれ。人として生まれるより生まれてこないほうが彼にとって良かっただろう。この世には、全く罰に落ちる人が経験するすべての災いを語るができる人はいない。(p.231) この世にその終わりが全く来ないということは全く悲惨なことである。そこに殺人者が向かい、そこに偽証者が向かう。そこに、律法破壊者と汚れた姦淫者が向かう。そこに、魔法使いと嬰兒殺しが向かう。そこに盗人と犯罪者、強盗と略奪者が向かう。手短に言えば、それを止め、より深く悔い改めない限り、神を怒らせるすべての邪悪な人が向かう。神の愛にかけて、私たちはあらゆる人に熟慮するよう願う。熱心に罪から離れ、心から神が私たちを畏れから守るよう祈ろう。熱心に邪悪、殺人、虐殺、略奪、裏切りを避けよう。私たちが自らを姦淫と汚れから守ろう。熱心に正しさを愛し、あらゆる不正を避けよう。できる限り、私たちの罪を懺悔聴聞僧に告白し、(p.232) 罪を償い、常に罪を止め、できるだけ、善行を行う。すると、私たちは永遠の罰から自らを守り、天の御国を得るのである。

3. 四旬節の第一日曜日 (The First Sunday in Lent)

(p.233) 親愛なる人たちよ。いかなる時も、私たちは神の利益を念頭に置く必要が大いにある。四旬節は、すべてのキリスト教徒にとって、まさに遵守すべきものである。なぜなら、この世では、1年の期間、必要なように、自らを悪魔から守ることができるほど慎重な人はいないからである。四旬節は、私たちすべてにとって悔悟のために定められている。すなわち、その期間に、私たちは、かつて悪魔の教えを通して行った不正を、全能の神に対して熱心に悔い改めるのである。私たちは、あらゆるものの十分の一を、正しく神に納めなければならない。この日々は、一年で「十分の一」の日として

見なされる。そして、私たちは、また、厳かに、神に対して十分の一を実行しなければならない。

あらゆるキリスト教徒は必要に応じて行え。非常に正しく断食を守れ。すなわち、あらゆるキリスト教徒は、病気でない限り、どんな日でも正午前に、食べ物や飲み物を味わってはならない。清らかな考えで熱心に教会を訪ね、毎日、ミサに立ち、主に熱心に祈りなさい。あらゆる人は、神の恵みの下、その日に食べ物を味わう前に、自らにふさわしく、施しを喜んで与えよ。その時になれば、懺悔聴聞僧が指示するように、自らの財産を享受せよ。あらゆる人は飲酒から自らを守りなさい。なぜなら、キリストは福音書の中でそれを禁じたからである。確かに、(p.234) 誰かがその日に非常に長く断食をしても、もしその後、飲酒や過度の食事で誤れば、断食は無益なものになるだろう。しかし、この期間を節制で守らなければならない。あらゆる人は熟慮し、必要に応じて行い、自らに負う悪行を告白し、熱心に贖いなさい。今は私たちが自らを熱心に清め、真の告白を通して私たちの罪を吐き出すのに適切な時である。それらを通して、私たちは容易にすぐに救われるだろう。悪魔の誘惑を通して恐ろしい悪行に陥る人は、また、それを熱心に公然と贖いなさい。この聖なる期間に、アダムが罪を犯す前に暮らしていた大きな喜びを破滅させた時に天使の共同体から離れたように、恐ろしい罪のために、当然のことながら、教会の共同体から離れざるを得ない人たちがいる。しかし、誰も悪行のために余りに絶望してはならない。人類を創造しその後、人類を貴い贖いで贖った人は非常に慈悲深い。彼は、罪を止め、嘆きの心で熱心に悔い改めるという条件で、罪深き人に慈悲を示し、大きな赦しを与えるだろう。

親愛なる人たちよ。私たちが述べたように、アダムは大きな喜びから追い出され、重い苦しみに至ったのである。同じように、かつて公然の罪で恐ろしくも犯した大きな行いのために、教会の喜びから追い出され、(p.235) 結局のところ、彼に聖なる必要を助言した人が教えるように、大きな苦しみで悔い改めるのである。より謙虚にそれを行えば行うほど、全能の神はすぐに彼に慈悲を示すのである。

親愛なる人たちよ。「断食の頭」である水曜日に、司教は多くの場所で、自らの必要のために、恐ろしくも公然に罪を犯した人たちを破門するのであ

る。さらに、復活祭の前の木曜日に、司教は、指示されるように四旬節に罪を悔い改める人を教会に戻すのである。それから、司教は赦免を彼らに読み上げ、彼らのために祈り、神の慈悲を通して彼らの罪を軽くするのである。それは有益な習慣であるが、私たちはこの国でそれを気に留めることはない。慣習化することが大いに必要であろう。

4. 主の晩餐 (Cena Domini)

(p.236) 親愛なる人たちよ。司祭が、四旬節の始めに、公然な大罪で罪を犯す人を教会から破門し、その後、今日のような「主の晩餐」の日に、熱心な悔悟に従い、彼らを教会に戻す例がどこから来たのか、私はあなたたちすべて、そして、それを知らない人に明らかにしよう。私たちの主は、最初の人であるアダムを、神聖に、清らかに、そして罪の汚れなく、彼の姿に似せて創造した。そして、私たちの主は、その類似物に私たちが熱心に自ら保持すべきことを教え、命じた。彼は言った「聖なるものとなりなさい。主なる私は聖なるものだからである」(レビ記第20章26節)。

親愛なる人たちよ。私たちは、アダムの善良さと神聖さのために、最初に神は彼を楽園にあるすべての喜びと栄光に置いたことを書物で読む。そこで、彼は神の天使を見て、彼らと話し、神自身と話をしたのである。もし彼が罪を犯さなかったならば、彼は決して死ぬことはなく、苦しみや悲しみを受けることもなかっただろう。しかし、彼が罪を犯し、悪魔の教えを通して、禁断の木の実を享受するとすぐに、すべての司教の司教である神自らは、アダムがかつていた楽しみから追放した。その後、彼はこの世で生きている間、悲しみながら生き、その後、地獄へ赴き、キリストが自らの慈悲を通して彼を悲惨さから救い出し、その後、常に神の天使と彼の聖人が永遠の栄光で暮らす天の教会へと彼を連れて行くまで、彼はそこで、その後長く留まった。

(p.237) 親愛なる人たちよ。熱心にキリストの例と彼の教えで神の民を必要へと慣れさせるために、司教はこの世で任命される。神がアダムを最初に彼の神聖さと善良さのためにアダムを天国に置いたという神自らが確立した例にならい、私たちはキリスト教徒を神の家に招き、置くのである。洗礼を

受けたあらゆる人は、洗礼後は神聖であり、洗礼の神聖さを通して、頻繁に教会に通い、神の教えと律法を聴くに値するよう、私たちは教える。もし誰かが神の律法を破り、公然と恐ろしい悪行で神に対して破滅するならば、神がアダムを追放した時に確立した例に従い、今日、かつて破った聖なる期間を熱心に悔い改める人たちに私たちがするように、彼らが謙虚な悔悟で自らを取り戻し、私たちが再び導き入れるまで、私たちは罪を犯した人を神の教会から追放するのである。

あらゆるキリスト教徒はまた、禁じられた教会での聖餐への参加が、悪行のため、心の中で自らを大いに戒め、自らを罪ある人として自覚し、自らが正当に保持してきたものに値しない、と正しく理解する懺悔者に有益であることを理解せよ。それにもかかわらず、人が罪を犯すほど、彼はより熱心に、より頻繁に、日夜、神の家を訪ね、外で跪き、嘆きの心でキリストに叫び、(p.238) キリストの破滅者であると見なし、神の家に入るに値しなくなるのである。常に悔悟で謙虚になればなるほど、その悔悟は神に受け入れられ、神の慈悲は彼に用意される。私たちおのおのは、もし誰かが主人をひどく怒らせたなら、彼が悔い改める前に、主人の前に赴くことは有益でないことを、世俗の事柄から知ることができる。確かに、それは、神に対して公然な行為で自らを破滅させ、その後、余りに素早く神の家に入り、外で立ち、教えられるように熱心に悔い改め、ついに悔悟と熱心な償いで、司教が教えるように、自らを教会に戻す取り戻す人には有益ではない。その時、司教は神の許しを得て、謙虚な心で熱心に自らを助ける人の罪の傷を和らげることができるのである。

親愛なる人たちよ。私たちに必要なように行おう。自らを助けよう。決然と心からキリストに向かい、できるだけ、彼の慈悲を得よう。彼は非常に慈悲深い。彼に称えと栄誉が常にありますように。アーメン。

5. 怠惰な司祭についてのエゼキエル書 (Ezekiel on Negligent Prophets)

(p.240) 預言者エゼキエルは、神の使者たちに対して神の怒りから自らを守るよう教える。神のことばで彼は彼らすべてに言った。主は次のように言った「私の口から言葉を聞いたなら、私から警告しなければならない」

(エゼキエル書第 33 章 7 節) など。彼は言った。非常に熱心に、神自らから沸き上がった神のことばを広く伝えなさい。もし罪人であるあなたが罪を戒めず、邪悪な人に悪行を示さないのなら、魂はひどい報いを受けるだろう。彼は言った。気に入るまま奢侈で暮らし、聖なる群れを気に留めない牧者に災いあれ。牧者よ、神のことばを熱心に聞け。彼は言った。彼を裁く中で、なぜ彼らが私の群れの監視を怠情に行うのか、私は牧者から知りたいのである。その後、彼らは榮譽を剥奪され、彼らが無視したすべてのことのためにひどい報いを受けるのである。彼は言った。民の罪を貪り、飲み込む牧者に災いあれ。すなわち、彼らは貪欲な人である。彼らは世俗の事柄を熱心に求め、当然すべきなのに、民に模範を示さず、頻繁に正しく宣べ伝えることなく、叫ぶべき場所ではあごで不平を言うのである。また、そのことについてかつて預言者イザヤはあたかも、口輪をした犬は吠えないと言うかのように語った。「この犬どもは強欲で飽くことを知らない」など (イザヤ記第 56 章 11 節)。使者たちは無口であり、畏れ、愛、または世俗の恥辱のために、神の正しさを語ることを避け、躊躇する。盗人が傷つけ始めても、(p.241) 守るべき群れを叫び声で守らない牧者は、群れに対して怠情である。悪魔ほど邪悪な盗人はいない。人の魂を傷つけることを彼は常に窺っている。盗人から民を守る牧者は、非常に注意深く、熱心に叫ぶべきである。すなわち、彼らは、貪欲な敵が神聖な群れの多くを大いに引き裂き、食い散らさないよう確かな教えで聖なる群れを守る司教や司祭である。彼らに耳を傾けることを怠る人は、神と共にせよ。主の名がとこしえに祝福されますように。

6. 司教の聖別 (The Consecration of a Bishop)

(p. 242) ルカによる福音書から一節

イエスは彼の使徒に言われた。「私は、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」。イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。など (ルカによる福音書第 24 章 49-51 節)

司教の職務について。

親愛なる人たちよ。福音書作者である聖ルカは、福音書の中で、主が昇天する前に、使徒と語り、使徒を司教として祝福し、正しいキリスト教徒を熱心に伝え、彼らに従う人にそれを命じるべく、彼らを使者と共に広く送り出した。今、私たちは、神の正しさを熱心に伝え、不正を禁じるために司教に任命される。望む人は注意せよ。今、私たちは、あなたたちが明らかにその祝福を見聞きしたように、神の名において、キリスト教を普及するため、司教を祝福する。望む人は理解せよ。さて、どのように司教の職が最初に確立し、神の差配で人に与えられたかを明らかにしよう。

(p. 243) かつて神自らの差配で正しい律法を定めた人はモーセと呼ばれる。彼は、神の指示に従い、アロンを司教として聖別した。その出来事後、キリストが、自らの使徒の多くを司教として祝福したように、別の仕方でも司教の職を確立するまでに、多くの民から司教が現れた。彼はペテロに権威を委ねた。また、天国の鍵を彼に委ねた。それを保持し、誰が天国に入ることが許され、また、許されないか、人の行いに応じて正しく支配するよう命じた。今や司教はペテロの代理である。彼らは神の正しさを熱心に明らかにしなければならない。私たちはあらゆる人に対して、熟慮し、心から神を愛すること、正しいキリスト教を熱心に守ること、聖なる教師に正しく従うよう教える。

司教は神の教えの代弁者であり教師である。彼らは頻繁に熱心にキリストに叫び、キリスト教徒の仲介者とならなければならない。彼らは神の正しさを伝え、あらゆる不正を熱心に禁じなければならない。司教を聞き従うことを怠る人は、神自らとそれを分かち合わなければならない。もし司教が罪を戒め、不正を禁じ、神の正しさを明らかにすることを怠り、叫ぶべき場所ではあごで不平を言うのなら、その沈黙のため彼に災いあれ。それについて、預言者は激しい口調で次のように言った。「次のことを主は言われた。(p.244)「悪人が悪の道から離れて命を得るよう諭さないのなら、彼の死の責任をあなたに問う」(エゼキエル書第3章18節)。私たちの主は言われた。罪を戒め、不正を禁じ、邪悪な人に彼の悪行を明らかにしようとしな

のなら、ひどく魂の報いを受ける。このことは、あらゆる司教の心得として役に立つ。望む限り、熱心に熟慮せよ。当然すべきなのに、正しく神の使者に従わず、聖なる教えに注意を払わない人は、友人ではなく敵に従うことになる。なぜなら、神の使者を無視する人は、神を無視する人だからである。福音書でキリストは明らかに次のように言う。「あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、私を拒むのである」(ルカによる福音書第10章16節)。彼は言われた。「あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾ける。あなたがたを軽蔑する者は、確かに、私を軽蔑する」。「あなたがたが地上でつなぐことは」など(マタイによる福音書第18章18節)。さらに別の箇所でも、私たちの主は確かに言われた。あなたがたが、この地上で、邪悪な行いのために固く有害な束縛で縛るものは何であれ、天であれ地上であれ、あなたがたが束縛を和らげ、解かない限り、すべて神の怒りと共に固く縛られるだろう。

親愛なる人たちよ。そのような例から自らを戒めなさい。私たちすべては必要に応じて行おう。神の怒りから自らを救おう。ああ、ああ、私があるあなたがたに言うことは真実である。もし彼が不正を熱心に禁じようとしなければ、神の使者が運ぶ荷は重い。(p.245) なぜなら、彼が善を行い、他の人が悪を行っても、もし彼が戒めようとしなければ、彼を傷つけることになるからである。神の使者が過ちを犯しても、凝視することなく、もし彼が良く教えるのなら、彼の教えに注意せよ。ちょうど、福音書で明らかに、次のようにするよう教えた時のように。「彼らが行うことは、すべて行いなさい。彼らの行いは見倣ってはならない」(マタイによる福音書第23章3節)。彼は言われた。「彼らの教えに従いなさい。彼らの罪には従うな」。誰も司祭の罪のために自らを軽蔑せず、もし彼が良く教えるのなら、彼の教えに従いなさい。

ああ、親愛なる人たちよ。私が願うように行いなさい。傲慢になることなく、私が言うことを聞きなさい。私は自らがことごとく行いでひどく破滅したことを知っている。また、さらに多くの人もそうであるが、神を畏れるあまり、この国を傷つけることの多くについて敢えて沈黙はしない。

7. 教会への献呈 (The Consecration of a Church)

(p. 246) 親愛なる人たちよ。神自らの称えと誉れとして聖別された教会がどのように崇められるべきかより良く理解できるよう、教会への献呈について明らかにしようと思う。かつて、エルサレムの町で、全能の神をたたえるためにある家が建てられた。それを建てたのはダビデの息子であり名高いソロモン王である。ソロモンは、彼にふさわしく、立派に成長した。若くからすぐに全力で神を愛し始め、神からの知恵を心から望み、彼はそれが許された。全能の神は彼に非常に大きな知恵を与えたので、それ以前、地上の人で彼よりも賢い人はおらず、神が望むように、あらゆる富を通して、彼よりも名高く、力強い地上の王はいなかった。彼は神を称えるために地上で寺院を建てた最初の人であった。彼の父であるダビデはかつてそれを行うことを意図したが、実行することなく、神が望むように、彼の息子であるソロモンによって実行された。

それは地上で建てられた最も名高い家であった。完成した時、王はすべての顧問官を聖別に招き、それをこの世で起こった最も名高いものとして神に委ねた。彼は非常に大きな貢ぎ物と少なくない施しを神に委ねた。そこに集まったすべての民は大いに喜び、調和に満ちあふれた。8日目に、あらゆる人が喜びと共に帰宅し、彼の助けによってそこで成就したことを全能の神に感謝した。名高い王が神と神の民にその家を祈りの家として捧げた時、彼は神自らに、(p.247) 彼の大きな慈悲によって、神の名においてそこで祈るあらゆる人に慈悲を示すよう、必要をそこで求める人にはどんな必要な時に助けになるよう熱心にそして何度も願った。私たちが教会を聖別する時はそのように行おう。私たちが神に教会を委ねるのは、キリスト教徒がそこに行き、そこで彼らの困窮を神に嘆き、罪の許しを祈るためである。確かに、教会を正しく求め、清らかな心で神に叫び、必要を神に願うすべての人の祈りを神は聞く。しかし、当然のように教会を訪ねる必要が大いにある。すなわち、大きな神への畏れで教会を訪ね、そこで熱心に神へと叫び、彼の慈悲を願うのである。確かに、教会を訪ねる度に、人がどのような考えでそこに行き、言葉または行いでそこで何を実践するのかを神自らは見るのである。そこで彼に必要なことをする人は、神と彼の天使を喜ばせるのである。言葉ま

たは行いで無益なことを行う人は、悪魔の意志を實踐し、必要以上に神を怒らせるのである。神を称え、神に祈ることの他を行うことは教会ではふさわしくない。確かに最も頻繁に無益にも教会を訪ねる人たちに災いあれ。すなわち、無益なことば、時には無益は行いで誤りに陥る惨めな人たちである。そこで、人は非常にしばし多くのことを求める。そこで、争いを聞くことはふさわしくない。そこで、人は求められる以上に無益にも非常に頻繁に寝ずの番を行う。キリスト教徒にとっては、愚かに寝ずの番をするよりは、教会で全くしないほうがましである。正しく寝ずの番を守ろうとする人は、神の畏れを持ってそこに行き、施しを捧げ、寝ずの番を行い、熱心に祈りなさい。そうすれば、寝ずの番は彼の役に立つ。なぜなら、それが神の気に召すからである。確かに、日夜、どんな時でも神の家で無益なことを行ってはならない。もし誰かがこの前にそれを行えば、今後は熱心にそれを止めなさい。なぜなら、教会が聖別され神に委ねられた後は、常に教会を丁重に守らなければならないからである。

親愛なる人たちよ。地上の王であるソロモンは、(p. 248) 天上の王、すなわちキリスト自身を意味する。彼が神の称えとして地上の材料で建てた家は、キリストが靈的な材料で建てた聖なる「教会」(エクレシア)を示す。すべての神の教会は靈的な意味では一つの教会と見なされる。それは「エクレシア」と呼ばれる。なぜなら、すべてのキリスト教徒は、一つの信仰を通して信仰を持ち、一つの信仰を通して、私たちはすべてを創造した一人の神を信じる。私が言うことは真実である。神の称えとして教会を用意する人に有益である。すべての材料のうち最も神の気に召すことは、神が喜んで留まる家になるよう自らを打ち立てることである。人が最初に洗礼を受け入れる時から、もし正しく自らを守るなら、聖霊は彼に留まる。もし、彼が悪魔の教えを通して神に対して罪を犯し、悪徳を愛するなら、聖霊はその住処を捨て、すぐに、悪魔が入って来る。あらゆる人はそのようなことに警戒し、自らの家を守る必要がある。すなわち、神の霊が留まるよう、あらゆる人は、心を清め、善行で自らを飾らなければならない。決然と正しく神を愛する人は、自らの中に神の気に入る家を用意する。彼の律法を守り、常にどのようにして神の気に入るかを熱心に求める人は、彼を正しく愛する。確かにそのように行う人の中に神は暮らし、留まるのである。

親愛なる人たちよ。古い教会への献呈でソロモン王が神に捧げた供物は、キリスト自らがそれを打ち立て、示したように、毎日、神の教会に捧げられる霊的な供物を意味した。あらゆる人は、能力に応じ、さもなければ彼が持ち実践する供物で容易に神の気に入ることができる。なぜなら、彼は人の能力以上のことを求めないからである。しかし、あるやもめについてかつて話したように、神は人の心の中で彼女を見るのと同じく、彼女に報いるのである。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは」(ルカによる福音書第21章3節)。あらゆるキリスト教徒が非常に頻繁に教会を訪問し、そこで全能の神への供物として熱心に祈りを捧げることは全く正しく、大いに必要なことである。なぜなら、供物は神の気に召すものであり、(p.249) あらゆる人はそれを供物へもたらすことができる。また、キリスト教徒が至るところで偶像を崇める恐れを持つべきではない。なぜなら、教会を訪ねることは、それを止め、深く悔い改めない限り、それを行うあらゆる人には無益だからである。

親愛なる人たちよ。ソロモンの教会聖別に参集した人たちは、その間、大きな喜びの中にいた。彼らが帰宅する時、彼らは大きな喜び、平和、調和と共に帰り、神に対して熱心にそこで起こった栄光と喜びを感謝した。民は、今や世界中で教会を訪ねるすべてのキリスト教徒を示した。聖別の間、彼らがそこで喜んだように、キリスト教徒はまた、喜びの心で教会を訪ねなければならない。なぜなら、憎しみや怒りでそこに赴く人の供物はそこで神の気に召すことはなく、完全に憎しみや怒りを捨てるまで、彼の祈りは神に聞き入られることはない。清らかな心でそこに赴き、聖なる必要のために喜び、熱心に神について考え、神へ叫ぶ人の祈りは神の気に召し、彼はそれを熱心に神に感謝に、より大きな喜びと共に、平和と調和を持って再び帰宅することができるのである。

親愛なる人たちよ。私たちが前に述べたように、すべての教会は一つの教会に属する。なぜなら、すべてのキリスト教徒は、一人のキリストに属するからである。彼は彼らすべての頭であり、彼らは彼の手足である。裁きが来る時、すべての人は神の裁きに参集する。聖人とキリスト教徒の魂は、彼らの頭であるキリストへと集められ、その後、常に、彼と共に天上の教会で永遠の喜びに留まる。

私たちは熱心に必要に応じて行おう。頻繁に身体で訪ねることができる教会を訪ねよう。それを通して、天国で私たちに約束された永遠へと赴くのにふさわしくなろう。常に完全で決然とした信仰を私たちの主に対して抱こう。なぜなら、そこには疑いがないからである。しかし、一つの正しい信仰は守るべきである。(p. 250) すなわち、すべてを創造した一人の真の神への信仰である。洗礼はすべてのキリスト教徒に共通する。もし何かを得るのなら、私たち各々はそれを正しく守らなければならない。神の命令を守る人は彼の洗礼を正しく守る人である。第一の命令は、何よりも、全能の神を愛することである。それから、第二の命令は、自らと同じく隣人を愛することであり、行われることを望まない限り、キリスト教とが他の人に行わないことは正しい。それは、非常に正しく、有益な裁きで、神の気に召すものである。その裁きを守る人は、確かに、永遠に、常に終わりなく、天に暮らし支配する人から最良の裁きを得るのである。(終)

参考文献

- Bethurum, Dorothy. *The Homilies of Wulfstan*. Oxford: Clarendon Press, 1957. Print.
- Dodd, Loring Holmes. *A Glossary of Wulfstan's Homilies*. Yale Studies in English XXXV. New York: Henry Holt and Company, 1908. Print.
- Lionarons, Joyce Tally. *The Homiletic Writing of Archbishop Wulfstan*. Woodbridge: D.S. Brewer, 2010. Print.
- 共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』東京：日本聖書協会，1995. Print.